

## 白山ふるさと文学賞

### 第四十一回 暁烏敏賞選考結果並びに選評

(梶田 叡一 委員長)

本年度で四十一回目を迎えた暁烏敏賞は、例年、多彩な職種や年齢層からの応募をいただいている。本賞に多くの関心が寄せられてきたことは大きな喜びであり、本賞が重ねてきた歴史と重要性を再認識するとともに、今後ますます継続・発展させていく大きな使命を感じている。

なお、本年(第四十一回)の応募作品数は、第一部門〈哲学・思想に関する論文〉が三十四点、第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉が十八点、合わせて五十二点であった。

去る九月二十五日、暁烏敏賞選考委員会(委員長：梶田 叡一、選考委員…川村覚昭・山本哲也・氣多雅子・上原麻有子)が、京都市内において開催された。

選考は、「伝統文化の継承発展と次代を担う子どもの育成を図る」という本賞の趣旨に則り、論旨が明確かつ独創的であること、全体の構成が整っていること、および広く市民の啓発に資するものであることなどに留意しつつ行なわれた。

今年度も、第一部門、第二部門共に様々な内容の優れた作品が多かったが、残念ながら、第一部門は「該当なし」という結果となった。選考委員会は長時間にわたる活発かつ慎重な審議を行った結果、第四十一回 暁烏敏賞受賞者を次のように決定した。

第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉

入選論文名

「通じないから、通じた」

―子どもと心を通わせるということ―

瀬口 優子(病院関係事務職)

【選 評】(氣多 雅子 委員)

本論文は子育てにおける大きな転換の経験とそれに伴う内省を記したものである。言葉でもって正しいことを伝えようとひたすらもがいて子育てをしていた時期から、「まなざし」によって対話の場を作ることを知った時期への展開が、生き生きとした筆致で描写されている。二人の子どもとどう向き合うかが、筆者自身の内面の課題を照らし出していくことに繋がり、この重層的な描写が内容に奥行きを与えている。繊細な長男との間にあった空気のズレが、次男との関係が変化したことを通して無くなっていく様子は、子育てに悩む読者を勇気づけるであろう。子育てに限らず、人と人との関係において、言葉以前の視線や表情や態度がいかに重要であるかが深いところから伝わってくる作品である。

微妙な内容を鮮やかに描き出す筆者の優れた文章力についても、高く評価したい。